



愛してお姫様

プリンプリ

小説 神崎美宙

挿絵 プリキ



## 登場人物紹介

Characters

### レイナ＝ルイーゼ＝ ヴィルヘルミーナ

ロウが護衛を務めることになった第三王女。高飛車で我がままだが、寂しがりやの一面もある。



### ミリアンヌ＝ヘンリエッテ＝ ヴィルヘルミーナ

レイナの母違いの妹。愛称はアン。愛らしく人懐っこい性格で、ロウに憧れている。



## ディアナ

レイナの身の回りの世話をしているメイド長。包容力あふれる大人の女性。

## ロウ＝コーラル

国王を暗殺者から守る手柄をたてた少年騎士。その働きからレイナの護衛を命じられる。



## カレン

ミアンヌお付きの平メイドで快活な少女。実はロウの幼馴染み。

序章		
第一章	初体験はメイドのお姉さん	013
第二章	幼馴染みのご奉仕	062
第三章	一途な妹姫	111
第四章	デレプリ	149
第五章	愛してお姫様	200
終章		251

「……ん、じゅぼ……さあ、ロウ様あ……イってください、私の口の中に精液を出してくださいませ……」

妖艶な笑みを浮かべたメイドは射精を促すように、いきり勃つ逸物の根元を扱きながら亀頭を舐め弄る。

「うぐっ……そ、そんなこと言われてもっ……」

本音を言えばもちろんこのまま気持ちよく射精してしまいたかったが、騎士としてどうしても女性の口内に精液を吐き出すことに抵抗があった。

しかしそんな少年の信念をも肉悦は徐々に蝕んでいく。舌のザラついた舌肉が裏筋を擦り、柔らかい頬裏の粘膜が敏感なカリ裏を包み込む。ぷりつとした唇の端からは唾液と先汁の混ざった涎がこぼれて、淫猥な音が浴室内に反響する。

「ディアナさんっ……本当に出ちやいますっ……」

ねっとりとペニス全体に絡みついてくるフェラチオの味は童貞少年には少し刺激的すぎた。先ほどの手コキで寸止めを食らい、再び湧き上がってきた射精欲を今度は止めることはできない。

美女の口内で逸物がギンギンに勃起し、浮かび上がった血管がピクッピクッと舐められるたびに初々しく反応する。

「ほら、我慢なさらずに……イってくださいませ……」

メイドの舌技に少年は限界まで追い詰められていた。

無意識のうちに腰が浮き上がり腹筋に力が入り、前かがみになってしまふ。そして行き場を失った拳はメイドの両肩を掴んでいた。

「ああ、くっ……イ、イクッ……！」

ドバドバと吐き出される我慢汁を飲み込み、さらには尿道の奥で渦巻く精液までも吸い出そうかといわんばかりに美女がペニスにしゃぶりついてくる。

若い男根は口淫奉仕の快感に悲鳴を上げた。強烈な吸いつきに耐えきれず理性の堤防は決壊し、怒涛の勢いで欲望の塊が肉棒の奥から駆け上がってくる。

「で、出るううっ！ 出ちゃうううう——ッ!!」

少年の絶頂を察したらしいメイドは爆発寸前の逸物を喉の一番奥まで呑み込み、快感に震える腰の突き上げを受け止めた。

びゅるるッ！ びゅるるううッ！ ぶびゅ、びゅるるうううう——ッ!!

後から後から精液が込み上げ、尿道を押し広げながら一気にメイドの喉奥へと吐き出していく。あまりの心地よさに一瞬視界が白く霞んでしまった。

「はんっ……うんっ、うぐ……こくっ、んく……」

立て続けに吐き出された白濁液の量の多さにディアナの美貌が一瞬強張る。しかし侍女はすぐに喉を鳴らし口の中に溜まっていくスペルマを嘔下えんかしていった。

「はむう……ちゅる、んむ、ちゅう……」

桜色に上気した頬には髪の毛が張りつき、額には汗が滲んでいる。あの優しく母性的な

普段のディアナからは信じられないくらい色っぽい表情を浮かべていた。

「はあ、はあはあ……ご、ごめんなさい……」

女性の口の中に無遠慮に射精を繰り返して、満足感と罪悪感の交じりあった複雑な気持ちだった。しかし全身からはドッと力が抜けて、バスチェアから転げ落ちそうになる。

「……ちゅむ、ふふ……たっぷりと出ましたね……」

やっと思物を吐き出したメイドは舌で唇の周りについた精液を舐め取っていた。

そして再び亀頭に入っただけでなく、尿道に残った精液を吸い出そうとしてくる。まさか異性と一緒にお風呂に入るだけでなく、手コキとフェラで射精させられるとは夢にも思わず、放心しかけている。

「あう、ディアナさん、いったばかりだから……くうっ！」

「まあ……射精したばかりだというのに、まだこんなに硬いなんて……もっとうご奉仕して差し上げたくりますわ……」

一度あれだけ吐精しておきながら天上に向かいいきり勃つ男根に、美人メイドは頬を染めつつ目を細めた。上体を少し起こしてから掌には収まりきらないほど大きな乳房を持ち上げ、ペニスを両側から挟み込んだ。

むにゅ、にゅりゅ……にゅむうむにい——。

「あぁっ……お、おっぱいがっ……」

汗とお湯で濡れた乳肌は肉棒を包み込み、その質感たっぷりの乳房の中に埋もれた瞬間

に感動と温かい柔らかさのあまり思わず情けない声を漏らしてしまう。童貞ペニスは谷間の中でビクビクと震え、快感が強すぎて腰が痺れてくる。

「ん、んっ……ふふ、ロウ様……気持ちいいでしょうか？」

すべすべとした乳肌は男根に吸いつくように絡みつき、優しく上下に扱きたびに大迫力の爆乳が股間の上で弾んだ。射精したばかりで敏感になっている亀頭や裏筋も全て、肉棒全体をすっぽりと包み込まれてしまう。そのうえわずかに顔を覗かせる先端にディアナは吸いつき、ロウは堪らず声を漏らした。

「は、はいっ……とつても、気持ちいいですっ……」

すでにメイドのご奉仕の虜になりかけていたロウは快感に耐えながら頷く。

そんな年上の女性の母性本能をくすぐるような姿に、ディアナも興奮してしまったように美しい貌がほのかに上気していた。

「あの……ロウ様……」

ギンギンにいきり勃つ肉棒に自慢の乳房を押しつけながら美女は甘い声と上目遣いで訴えかける。

「ひゃいっ……な、何でしょう!？」

思わず上擦った声が出てしまった。

「ロウ様のここは、まだご満足されていない様子ですので……もっとご奉仕させていただきますようにもよろしいでしょうか……」



ぴちゅ、ちゆるっ……チロ、にゆりゆう——。

ミリアンもメイドに負けじと小さな舌をいっぱいに伸ばして、竿の根元の辺りを舐めてくる。二人の少女が股間に顔を埋め競い合うようにペニスに舌を這わせる。興奮は高まりすぐに男根は硬度を取り戻した。

「二人ともっ、待って……ああっ……」

同時に二箇所から甘い刺激が肉棒をなぞり、そのたびに腰がビクビクと震え、立っているのもやっとなくらいだ。

「……ん、ちゅぱ……ねえ、ロウ……気持ちいいでしょ？」

「もう……アンだつて舐めてあげてるのにい〜」

侍女が潤んだ瞳で上目遣いに訴えてくる。その横では王女が小さな口で懸命に牡棒を啜えようとしていた。

ぢゅ、ちゅぶっ……ぢゅ、ぢゅっ、ちゆりゆるるっ……。

プリンセスとその専属メイド。雲の上にいるような存在だった美少女達の献身的な奉仕を受け、ムクムクと性欲が湧き上がる。言葉では二人を制止しようとしているが、身体は快感に翻弄されかけていた。

「……気持ちよい、けどっ……うう、あくっ……」

さつき射精したばかりだというのに若いペニスは雄々しく反り返り、亀頭のワレメからは牡臭い我慢汁が溢れてくる。

「ぴちゅ、ちゅ、ちゅむ……少し苦あい……」

「ン、ちゆる……フフ、アン様、まだまだですね……」

「……大丈夫だもん、ちゅ、ちゅううううつ、ちゅチュパあつ……」

それでも美少女たちはお構いなしに舌愛撫を続けた。二枚の生温かい舌肉が血管の浮かび上がるペニスの表面を二チュニチュと縦横無尽に這いずり、時々カリの周りや裏筋をかすめていく。

(ダメだ……また出ちやいそうっ……)

DEAナの男の感じるポイントを的確に責めてくる愛撫も気持ちよかったが、少女達の奉仕は予想のつかない動きで不意打ちのように弱点を突いてくる。そのくせすぐに別の場所を舐めたりと、もどかしくて焦れたい快感に煽られた少年の理性はグラグラと揺らいだ。

「あうっ……そんなに舐められたら、我慢できないっ……」

すでに限界まで勃起した肉棒は唾液まみれになり、蠟燭の光に照らし出され妖しく濡れ光っている。舌の粘膜とペニス絡み合う水音が室内に響き、射精の欲望がじわじわと湧き上がってきた。

「……ちゅ、ンう……もうイきそうなの……?」

「また、せーえき出ちやいます〜?」

少年は腰を震わせながらコクコクと頷き、限界が近いことを訴える。

このまま快感に身を任せて射精してしまいたかった。しかし下半身に力を込めようとした時だった。

「ンぷあ……ダメー、まだ出しちゃだめっ……」

侍女は痛いくらいに勃起した肉棒から口を離し、根元をギュッと握り締める。

「はひいっ！ な、何でっ……」

射精ができると悦んでいたところ、不意に快感が去っていき絶頂寸前のペニス放置されてしまう。もう少しでいけそうだったのにと、中途半端に高まった興奮は空回りしてもどかしさで下半身が疼く。

「えー、何でしゃせーさせてあげないの？」

「そ、そうだよ……」

自動的に奉仕を中断させられ、ミアアンヌは不満そうに口を尖らせる。少年も無意識のうち少女達にフェラチオを再開して欲しいと視線で訴えていた。

「……射精するなら、私とエッチして射精してっ！」

「え、えええ……ッ!?」

突然の申し出に驚いたが、メイドの方はもう決心を固めているのか頬を赤らめながらもその瞳はしっかりと少年を見据えている。そしてメイド服の胸元をはだけ、ブラジャーまですらして誘惑してきた。

「カレンったら、一人だけズルイですよー」

王女の非難にもお構いなくカレンは幼馴染みの少年に抱きつき熱い視線をぶつけた。温かな体温と柔らかい身体に、むにいつと潰れる生おっぱいの感触に理性は崩壊寸前にまで追い詰められる。

「ねえ、ロウ、お願い……それとも、私のこと嫌い？」

「そ、そんなこと……」

小さい頃あまり存在感のなかったロウは人気者の美少女に憧れていた。思い出せばそれが初恋だったのかもしれない。

騎士を目指している時にレアイナと出会い憧れの対象は変わったが、その淡い恋心は再会した時からじわじわと胸の内によみがえってきていた。

「……カレンのこと嫌いなわけじゃないか！」

「きゃッ！」

中途半端なところでフェラを中断された上に、大好きだった少女から誘惑され、普段は大人しい性格のロウも我慢の限界だった。勢いに任せて幼馴染みの両肩を掴みベッドへと押し倒してしまふ。

しかしつい先日童貞を卒業したばかりで、いざセックスとなるとどうしていいか分からず固まっていた。

「あ、慌てないで……優しく、お願い……」

カレンは突然に仰向けに組み敷かれ驚いた様子だったが、少年騎士を落ち着かせながら

ゆっくりと両脚を広げる。短いスカートの裾から健康的な太股が露わになり、その魅惑的なポーズを目の前に思わず喉が鳴った。

「わあ、カレンったら大胆〜」

すっかり放置され気味で頬を膨らませていたプリンセスも、驚くほど侍女の姿は扇情的だった。

「いいの……カレン？ ボクと……その、エッチしても……」

何を今さらとも思ったが、どうしても不安になってしまふ。そんな奥手な少年の気持ち察してかメイドはさらに脚を開き、オナニーをしていたせいでぐっしりと濡れ、淫肉の形まで透けていたショーツを横にずらし甘い声で囁く。

「だってロウのこと好きだもん……」

「うん……それじゃあ……」

少年は誘われるがままにカレンの下着へと手を伸ばした。肉感的な太股に触れながらショーツを引きずり下ろしていくと、髪の毛と同じ紅色の陰毛に彩られた秘肉が露わになる。(カレンの……すごく、いやらしい……)

ピンク色の大淫唇はぴったりと閉じているが、肉ピラの間からは透明な蜜が溢れていた。少し甘酸っぱいような香りが漂い、少年の欲情をさらに加速させる。

「むうー、アンだけ仲間外れみたいー」

自分が先に誘惑していたのに、すっかりメイドに少年を取られてしまった王女は不満げ

に頬を膨らませた。しかしロウの頭の中は幼い頃の憧れだった美少女とのセックスでいっぱいになっている。

「い、いくよ、カレン……」

フェラ奉仕で寸止めをくらい、ギンギンに勃起したままの逸物を幼馴染みの陰裂へとあてがった。

「うん……きて、ロウ……」

普段は活発なカレンの女の子らしい姿に引き寄せられるように腰を突き出していく。

ちゆく——。性器の粘膜同士が密着し濡れた音が響く。快感を渴望していた亀頭が淫唇に包まれて熱く潤んだ感触に下半身が蕩けそうになる。

「カレンっ、カレン……」

「ああっ、入ってくるぅ……」

蜜で濡れた膣肉はズブズブと肉勃起を呑み込み、吸いつくように肉ピラが絡みついてきた。高まる興奮と性欲に突き動かされるままに腰を動かし、男根をねじ込んでいく。

「い、痛いッ……」

ちようど亀頭が全て膣内に入った時、メイドが眉を顰めて小さな悲鳴を上げた。肉棒に絡みつく膣圧の強さに手間取っていたロウはハッと我に返る。

「え！ まさか……」

結合部に目をやると愛液で濡れていた淫唇の間から破瓜の証が滴り落ちていた。

柔らかい膣肉をかき分け挿入していた男根をみっちりと締めつけてくる感触に夢中になっていたが、侍女が処女だったということを知り少年の動きが止まる。

「わあ……痛そう……大丈夫、カレン？」

興味本位で少年を誘惑していた王女もいざ目の前で処女喪失シーンを見て、両手で口を覆いながら瞳を大きく見開いていた。

「だ、大丈夫……だから、続けてえ……」

心配させまいと思つて微笑んでくれるがその目尻には涙が浮かび、強がっていることはすぐに分かった。それでも自分を求めてくれる少女の一途な想いに胸は熱くなる。

「う、うん、でも痛かったら言つてね……」

無言で頷く少女の膣内は挿入しているだけでも射精しそうなほど、強く締めつけ男根に絡みつく。その温かい柔肉の感触に耐えきれず、腰を使い始める。

「うっ、あぁっ……いいよ、好きに動いてえ……」

始めはゆっくりと腰を前後に動かしていくが、すぐに二人の結合部からは大量の愛液が溢れてきた。それでいて処女の膣壁は強烈に肉棒に吸いつき、まるで精液を搾り取ろうとするかのように蠢く。

(すごいっ……カレンのおマ○コ気持ちよすぎるっ……)

初めて味わう同世代の膣肉はディアナの時より柔らかさは劣るものの、しゃぶりつくような密着感は格別だった。その心地よさを貪るように自然と腰の動きは速くなり、腰使い

が荒々しくなる。

「ひいあ！ ああつ、んはあ！ あう、は、激しいっ!!」

蜜でドロドロになった膣肉に勃起した逸物を突き立てるたびに、少女の細い身体が大きく波打つ。甲高い嬌声に色めいた吐息を孕ませながら、ギユッとベッドのシーツを握り締めた。

「カレンだけいいなあ……」

メイドとのセックスに夢中になっていると、横から腕を引っ張られる。

「アンだつてロウさんとエッチしたいもんっ……」

「はあ、あつ……えっ！ ンンっ!!」

幼い美貌を嫉妬に染めた王女の顔が迫ってきた。小さな上半身をいっばいに伸ばして唇を押しつけてくる。不意の出来事だったためすんなりと王女との接吻を受け止め、自然とその華奢な身体を抱き寄せた。

それを咎めることもなくミリアンヌの腕はロウの首に回り、さらに強くお互いの唇を押しつけ吸いあう。

そして根元まで膣肉に埋没した逸物を引き抜き、再び亀頭が子宮口に突き当たるほど激しく腰を振った。

「あ、ひあ！ 激しいっ！ ロウ、もつと……もつと突いてえ！」

ズツちゃ、ヂユツ、ちゅヂユ、ズツチャ！

男根にしゃぶりつく肉壁を押し広げながら膣奥を貫くと、大量の蜜液が溢れ二人の股間だけでなくシートまで濡らした。破瓜の痛みから身体を強張らせていたカレンもいつしか一突きごとに腰をうねらせ、甘い声で快感を訴えている。

「うっ、あっ……カレンも……き、気持ちいいっ!？」

メイド服の上からでも分かるほどの美巨乳を大胆に揺らしながら喘いでいる幼馴染みの姿に、自分が感じさせているんだという実感が湧き上がり嬉しくなる。思わずそのたわわに実った乳房を驚掴みにしていた。

むにゅ、むにゅっ、むにいい、にゅむううううう——。

「や、やあっ……そんなに強く揉んじやダメえ……」

綺麗なお椀型のおっぱいはグニグニと両手の中で形を変える。ゴムマリのような弾力ある揉み心地と、肌理きめ細かい乳肌は掌に吸いつくようになめらかで若さ溢れる瑞々しい肌触りに心が踊った。

「ん、ちゅぷ……もつとおろ、キスしてください……」

ミリアンヌは何とか少年の気を引こうと首に腕を巻きつけて、小柄な身体を精一杯密着させてくる。そして激しい接吻は自然と舌を絡ませあうディープキスへと変化し、プリンセスの甘い唾液とぬめる舌を無心で貪った。

（二人とも可愛いし……気持ちいいっ!）

脳が蕩けてしまいそうな口性交の官能に刺激され、処女肉をえぐる逸物はさらに硬度を

増していきり勃つ。力強く刻まれる腰の律動のせいで男根と膣壁の摩擦は激しさを極め、快感と共に射精欲が湧き上がってくる。

しかしこのままでは自分とメイドだけで果ててしまう。荒ぶる性欲に思考を支配されながら、懸命に唇を重ねてくる王女の存在が気になった。

(アン様も……アン様も気持ちよくしてあげたいっ……)

幼く愛らしい顔立ちを色情に染め、すっかり快感に蕩けた瞳が上目遣いがロウの本能を射貫く。片手をドレスのスカートの奥へと忍ばせ、無遠慮に下着の股布を指で搦め捕り横にずらした。

「アン様、失礼します——」

「きゃうん！ ロ、ロウさん……はう、あうんっ……」

一瞬だけ驚きの表情を見せたが唇をキスでふさぎ、驚くほど蜜で濡れた秘所を指で弄ると甘ったるい声を漏らしている。

「も、もうダメっ！ はぁん、あぁっ……気持ちよすぎておかしくなっちゃうっ！」

ギンギンに張り詰めた怒張にむしゃぶりつく淫唇の間から白く濁った愛液が溢れて、二人の股間を汚した。そして完全に包皮を剥け上がらせるほど大きくなった肉芽が、侍女の感じっぷりを物語っている。

「チュ、ちゅばっ……どう、ですか……気持ちいいですかっ？」

「あぁん……ロウさんの手え、エッチですう……」

王女の恥丘は無毛でつるつるだった。一本の筋のような淫裂は蜜を滴らせ、指先に吸いつき締めつけてくる。皮膚をふやかすほど熱い腔肉に少し指を入れただけで、ミリアンヌの身体は大きく仰け反った。

「きゃひい！ あっ、な、何でこんなにい……あひんっ！」

積極的に迫ってきていたが、やはり幼い身体は性的な刺激には弱く、ぷにぷにとしたワレメをなぞるといふ愛撫にも王女は甲高い悲鳴を上げる。その可愛らしい痴態が少年の興奮をいつそうかき立てた。

（もうイキそうっ！）

強烈な締めつけの中を何度も肉勃起が貫き、パンパンに膨らんだ亀頭を子宮口にぶつける。必死に射精を堪えているが、もう腰は勝手に動き出し自制できない。

「あ、あうっ、ああんっ！ ロウ……もう、ひいあ、ああああっ！」

痛々しく押し広げられた処女肉を男根で突かれるたびに侍女の健康的な肢体は弾け、瑞々しい巨乳が大胆に揺れ踊った。ベッドの白いシーツの上にはらまいた髪の実紅がよく栄え、大胆に広げられた両脚がピストンの反動で跳ねる。

「だ、だめだっ……もうイクっ！」

「いいっ、ああっ……どうして、こんな……あひんっ！」

股間から全身へと伝わる快楽を貪るように我を忘れて腰を振るった。下半身の動きに誘われて童顔王女の秘芽を弄る手つきも乱暴になる。



「きゃう！ ア、アンも変な気持ちになっちゃいますううっ！」

腕の中でプリンススが黄金の長髪を振り乱し小さな身体を痙攣させ始める。甲高い嬌声を上げる唇に吸いつき、絶頂寸前のペニスがピクピクと脈動した。

「ひいあつ、いやっ、このまま、ああひいっ！ も、もうっ、きゃはん!!」

柔らかい膣肉が収縮しさらに激しく男根を締め上げ、尿道の奥まで湧き上がってきている精液を搾り取らんばかりに蠢く。

「はうう、アン、イツ、イツちやいますううっ!!」

ぷしゃああ——ッ！ 敏感なクリトリスをこれでもかと擦られた王女の膣口から、潮が噴出し、掌から手首まで濡らした。

「……ちゅぐ、ぷはっ！ もうイクっ、出るっ……あ、あつ、イクッ!!」

処女肉を引き裂かんばかりに張り詰めたペニスが膣壁に蕩けてしまうような錯覚を感じた瞬間だった。おびただしい量の精液が一気に尿道を駆け上がる。

びゅびゅ——っ！ どびゅ、びゆるる！ どぶびゅ、びゅぶ、びゆるるううッ!!

「ひああつ……あひい、ひいんっ……中で、出てるうっ!!」

「きゃうう！ アン、おもらししちゃいますううっ!!」

王女と侍女。絶頂に達した二人は甘い喘ぎ声を奏で、頬を淫悦に染め虚ろな瞳で少年を見つめた。

(き、気持ちいいっ……)



「いいっ、気持ちいいよっ、ロウっ……もっど、してっ……」

「アンにも……しゃせいするときはアンにください」

少年の限界に近いことを悟った美女達は自分の膣で射精してもらおうと、桃のような綺麗なお尻をさらにいやらしくねらせて誘惑してくる。

「私も、ロウ様のお情けが……ちようだいしとうございます……」

ディアナはもう待ちきれないと自らの手で圧倒的なサイズを誇る乳房を揉みしだき、反対の手でクリトリスを弄りながら巨尻を揺らめかせた。あのおっとりとして母性的なメイドの普段とのギャップに少年は目を輝かせる。

「はあ、あっ……ディアナさん、そんなにボクのチンポが欲しかったんですか……?」

理性が性獣と化しかけている少年の視線は、思わずお姉様が見せる艶姿に引き寄せられた。細く長い指にニチュニチュと愛液を絡め、ベッドに押しつけた顔を捻ってこちらを見つめる瞳は色情に染まっている。

ずにゅうううっ……ずりゅ、ずちゅ、ずちゃっ!

「ああっ! 熱い、ど、どうぞ……私の膣で、イってくださいませっ……」

年上の美女から熱烈に求められ、気分をよくした少年は一気にそそり勃つ肉棒をワレメへと押し込んだ。アッぷにまとめた髪がはらりと揺れ、豊満な肢体を震わせながら歓喜の悲鳴を漏らしている。

「ロウったら、どうしてわたくしが後回しなんですのっ!？」

積極的に挿入をねだる妹や侍女達に押し出されるような形になり、あまり順番の回ってこないレイイナは眉をツリ上げ必死に少年を急かした。

「ねえ、ロウっ……私も、私も……はぁん、ほ、欲しいよお……」

エッチにおねだりすると挿入れてもらえると知ったカレンは、四つん這いのまま片手を下から股間へと伸ばし、人差し指と中指で大淫唇を広げて見せた。

「じゃあ、今度はカレンにっ……」

「ちよ、ちよっと、わたくしはっ……」

まるでペニスが欲しくて涎を垂らしているような幼馴染みの膣口に、今にも破裂してしまいそうな逸物をねじ込んだ。

「きゃうううううううっ！ お、おっきいい、すぐく大きくて、感じちゃうっ……」

「ああ、アンも欲しいですうっ……」

「私にも、ディアナの膣もロウ様で満たしてくださいませっ……」

このまま全員の膣肉を貪り続けたかったが、もう限界だった。カレンの膣から引きずり出したペニスを今にも泣き出しそうなレイイナの膣に根元まで一気に貫く。

「ひぁんっ、ああっ……やっとなたくしなのですねっ……」

ドレスの胸元から露出した巨乳が腰突きの衝撃で、ふるんと大きく揺れた。待ち侘びた愛しい少年のペニスにしゃぶりつくレイイナの膣は、悦びむせび泣くかのように愛液を分泌させる。

「ダメっ、もう我慢できないっ！」

「ふあ、あはあっ……それなら、このままわたくしの膣にっ……」

最近ずっと膣出しして馴染んだレイナの蜜壺は、精液を搾り取るうとするかのように蠢く。

「くひいっ、な、何でっ……抜いてしまえますの!？」

後ろ髪を引かれる思いだったが、射精寸前のペニスを妹姫の処女肉へとぶちこんだ。

「はああんっ、すごいっ、あん、イっちゃいますうっ……」

キツイ膣肉を貫き先端からは我慢汁がドバドバと溢れている逸物を一擦りで引き抜くと、ディアナ、カレンと一気に奥まで突いては隣へと移動する。

「ロウ様のペニスが、奥にいっ……ああ、もう我慢できませんっ……」

「私も、イっちゃうっ……気持ちいいっ！ あひ、ひいあああゝゝゝっ!!」

甘ったるい悲鳴を上げる三人はガクガクと腰を震わせ、膣内も激しく収縮を繰り返し始める。

「ちよつと、わたくしはまだっ……ああ、ロウもつとわたくしにいっ……」

ふわふわと揺れる巻き毛を揺らしながらレイイナは必死に挿入を懇願した。

ただでさえキツイミリアンヌの膣が痙攣を始め、引き抜く瞬間に強烈にカリの裏を激しく擦られる。それがトドメとなって股間から全身に電流のような刺激が走り、何とか保ち続けていた意識が快樂の濁流に飲み込まれた。

「イクっ、もう出ますッ！ ああっ、あああああ~~~~ッ!!」

愛液と先汁の混ざった体液で濡れドロドロになった肉棒が空気に晒され、込み上げる精液が尿道を凄まじい勢いで駆け上がる。

びゅううううッ！ びゅぶぶっ、びゆるる~~~~ッ！ どびゅびゆるううう~~~~ッ!!

腰が蕩けそうなほどの絶頂快楽に視界が白く霞む。射精の反動で肉棒はビクビクと震え、膝立ちになっているのがやっとなくらいだった。

「きやうっ、熱いっ……お尻がヤケドしちゃいますううう~~~~」

「ああっ……もつと、もつとかけてくださいませ……」

「いイっんっ！ ロウの精液温かい……」

「きやっ！ ちよつと、出しすぎですわよっ……」

ギンギンに振り返った肉棒はこれでもかと白濁液を撒き散らし、次々に美女達の尻肌を白く汚していく。吐露を尻だけでなく背中や髪にまで浴び、恍惚とした表情を浮かべ鼻にかかったような熱っぽい声を漏らす。

（ああっ……止まらないい……）

干からびてしまうかと思うほど何度も何度も射精し、シャワーのように白濁液をぶちまけ筆舌に尽くしがたい快樂絶頂に浸っていた。

二度目だというのにおびただし量の精液を吐き出し、やっと思つたかと思つと今度は全身を脱力感が襲う。その場にへなへたと崩れた口ウを、ミリアンヌやメイド達はうっ

とりとした表情で見つめていた。

「ちよつと！ どうしてわたくしの中に出不いんですのっ！ そ、それに……一緒にイきたかったのに……アン達ばかりに挿入<sup>い</sup>れて……どういうつもりですの!？」

メイド達が満足げに微笑み、心地よい疲労感でまったりとした空気をかき消すようにレアイナが不満を爆発させる。

妹や侍女の前だということもお構いなく王女は愛しい少年に抱きつき、頬を膨らませ拗ねたように顔を胸に擦りつけてきた。

「ご、ごめん……その最近ずつとみんなとエッチしてなかったの……」

「……はふう、こ、こんなことでは誤魔化されませんわよ……」

長く艶やかな髪を撫でながら謝ると、レアイナはまだ何か言いたげだったがくすぐったそうにツリ目を細めている。

絶頂の余韻に浸っていた三人も身体を起こし、抱き合う二人を羨ましそうに、また微笑ましげに見つめていた。一途に自分のことを想ってくれる彼女達とのセックスも気持ちよかったが、やっぱり最後は大好きなレアイナとしたい。

「レアイナ様……入れていいですか……？」

耳元で囁くようにお願いをすると、王女はビクッと身体を震わせたが嬉しそうに何も言わず頷いた。その姿が可愛くて、すぐにベッドに押し倒してしまふ。

「ひゃんっ……いきなりですわね……あとそれから、様はいりませんわ」

金色の巻き毛をシートにばらまき仰向けに横たわるレアイナのドレスの裾は大きくめくれ上がり、蜜でびしょ濡れになっている女陰が露わになった。牝の香りを漂わせ淫唇は待ちきれないとばかりにヒクつく。

「それじゃあ、入れます……レ、レアイナ……」

これだけ濡れていれば今さら愛撫も必要ないだろう。ロウはすでに硬度を取り戻している逸物をレアイナの膣へと押し当てた。

「まあまあ。名前で呼び合うなんて、まるで恋人同士のようにです」

「うう……完全に二人の世界……」

「お姉様、ロウさんにメロメロなんですわ〜」

ミリアンヌやメイド達は羨ましそうに絡み合う二人に近づく。

「当然ですわ。ロウはわたくしに惚れてるんですよ」

すっかり機嫌が直りかけているレアイナは自信満々に言い放ち、大淫唇は亀頭が触れた瞬間に奥へと吸い込むかのようにしゃぶりついてくる。逸る気持ちを抑え何度か縦筋に沿って先端でなぞると、プライドの高いお姫様が切なげに声を上げた。

「ああっ、いきなりっ……ああ、はあああ……」

もう少し王女の可愛い反応を楽しみたかったが、若い牡の身体はすでに我慢が利かなくなっている。極上の膣肉へといきり勃つ男根を一気にねじ込んだ。

「い、いやですわ、焦らさないでっ……きゃううううっ！」

ずぶ、ずぶっ、ずりゆううう……ッ！

絡みついてくる肉ヒダごと膣奥へと押し込み、龟头は子宮口にまで達する。

「ひいあっ、入ってきますすわああ……」

今の一撃で軽く達してしまったのか、膣洞は縮動を繰り返し色っぽい唇からは悩ましくない吐息がこぼれた。上品な顔立ちは肉悦に溶け、むき出しになった乳房がぷるんぷるんと弾む。

（うっ、きつい……気持ちよすぎて、また出ちゃうっ……）

身体の相性もばっちりのようで、挿入しただけで射精しそうになった。慌てて腰を引くが、その行動もイッたばかりで敏感になっているカリ裏が強烈に擦れて裏目に出てしまう。

「口、ロウ……ああ、激しいですわっ……」

それだけで一気に射精感は高まり、もう腰の動きに歯止めが利かなくなる。もうゆつくりとしている余裕もなく、初めから激しく腰を突き立てまくった。

ズチャッ、ズツチャ、ズニユウ、ズチャズチャ……。

「ああ、な、何ですの……いや、今胸を揉まれたら、きゃひいんっ！」

飛ばす少年につられて、王女も駆け足で絶頂への階段を駆け上る。腰のうねりに合わせて大胆に踊る乳房にディアナとカレンが手を伸ばした。

「お姉様のおっぱいって大きくて柔らかくって羨ましいですー」

「何だか、ロウに抱かれてる時のレアイナ様ってすごく可愛いですね……」



妹姫と幼馴染みは王女の興奮で汗ばんだ乳房をこねたり、舌で乳首を舐めたりと積極的に愛撫に参加してくる。

「ひゃうっ……じよ、冗談はおよしなさいっ……」

頬を上気させ身体をよじるが、左右に広げられた両脚を少年に抱えられているので逃げられなかった。しかも激しい腰使いを受けて全身を快感で蕩かされ、手にも力が入らないらしい。

「僭越ではございますが、レイイナ様とロウ様のセックスをお手伝いさせてください」

ディアナまで二人に身体をすり寄せ、結合部に指を差し込んだ。そして包皮からむき出しになっているレイイナの秘芽を指先で転がす。

「きゃひい——っ！ そ、そこは、ダメですわぁっ……」

美女達に好き放題に身体を弄られて乱れているレイイナの姿に、少年の興奮は完全に暴走していた。目の前には愛するお姫様だけでなく、美しい王女やメイド達がおっぱいや白濁液で汚れたお尻をむき出しの半裸姿で絡み合っている。

（あぁっ、やばいっ！ も、もう出そうになってきたっ……）

もう何も考えられなくなり、力任せにビキビキと血管の浮かび上がった肉棒を膣壁に擦りつけ亀頭を子宮にぶつけた。レイイナをいっぱい感じていたくて全身の神経をベニスに集中させる。

「もう、イっちゃいそうですか、レイイナ様？」

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**